



[岡山県岡山市]

診療所の
IT活用事例

大森クリニック

院長 大森裕也氏

稼働電子カルテシステム

Medicom-HRⅢ

(パナソニック ヘルスケア)

最重要視した選定の要件は、 使いやすさと特徴的な機能。 運用性の高さは職員にも好評

循環器と皮膚科の疾患を中心としたプライマリケアを多角的に地域へ提供する大森クリニック。大森裕也院長は先代からの継承に際して建物を新築し、パナソニック ヘルスケアの電子カルテ「Medicom-HRⅢ」を基軸としたIT基盤を構築した。一般的な診察・治療に加え、手術や下肢静脈瘤の日帰り治療を手がけるなど診療の幅が広い。ITによる情報の集約と管理は必須であった。大森院長は、「システムを使いこなすことで将来対応や経営支援等の効果も得られるはず」と電子カルテの今後の運用に期待を寄せる。

将来対応も想定して ITシステム基盤を構築

——昨今のクリニックIT化には、何が重要とお考えですか。

「将来を見据えた対応が可能なIT基盤の構築」ではないかと考えます。

特に当クリニックの場合は、2階建ての1階が診察・検査用、2階が手術用という、プライマリケア施設としては珍しい建物構成となっています。現在の手術件数は週2件程度なので2階に常勤スタッフを置いていませんが、件数増加等により常勤体制となった際、2階の各室および1階と2階間で情報共有が可能となるように考慮して、あらかじめネットワーク等を構築しています。

また、現在は開業から間もないため実施できていませんが、将来的に往診主体で在宅医療を手がけたいと考えています。開業してからも地域ニーズがどのようなかを私なりに調査してきましたが、在宅医療の要望は今後、より強くなるのではないかと感じています。そこで往診の際の院外での情報閲覧・入力ツールとして、持ち運びが可能な小型ノートPCを処置室にあらかじめ用意しました。現在は、この端末を別目的で使用していますが、往診を始めた際には在宅医療にも

活用する予定です。

これらは開業後、追加導入する場合、工事やコスト等の面で不利になるのは自明です。やはり開業前から、自院の診療方針や将来ビジョン等に合わせてシステムを入念に計画しておくべきという意識が、クリニックのIT化においても必要ではないでしょうか。

——電子カルテ選定のポイントについて伺います。

まず重視した点は「誰もが認める電子カルテの使いやすさ」ですね。今後、冒頭述べたように将来対応も含め広範囲にクリニックITを使いこなしていくためには、後に加わったスタッフでも短期間のうちに操作に慣れるほどの親和性の高さが電子カルテに不可欠、と考えたからです。

さらに「『一芸に秀でた』機能を数多く持ち合わせていること」も重視しました。カルテの閲覧性やシェーマの使い勝手など、電子カルテの基本機能は今や各社で大きな性能差はみられないため、特定の機能が優れているという優位性は選定ポイントの1つになります。

それらを比較検討した結果、パナソニック ヘルスケアの電子カルテシステム「Medicom-HRⅢ」を導入するに至ったのです。

使いやすさを始めとして 機能は総合的に高水準

——「Medicom-HRⅢ」は、どのような機能が優れていますか。

特に気に入っているのは「シート入力機能、使いやすさ」です。ルーチ的な診療記録を迅速にこなせすし、必要に応じてさまざまなシートを準備することで業務がさらに効率化されるという期待を抱かせてくれます。開業から半年以上が経過し、当該地域の検査や処方ニーズがある程度はつきりしてきたので、今後はその傾向に合わせてワンアクションで疾患別に検査や処方が簡単に入力できるようなシートを作り込んでいこうと思っています。

他には「ワンタッチセット登録」も便利です。これはカルテ2号紙に記載した経過と処方等をセットとしてワンタッチボタンに登録できる機能で、それによりショートカット的な入力が可能になり、とても助かっています。

現在は血液検査のみに活用していますが、「処方歴と検査結果の時系列表示機能」も経時的な診療録の確認のしやすさの面で重宝しています。また、文書管理機能も優れていると感じますね。紹介状や問診票など重要な文書は全てスキャンして

Clinic Information

大森クリニック



幅広い診療を基本方針に掲げ、 建物の2階に手術室等を設置

1925年に大森裕也院長の祖父君が開業、73年に父君である前院長が継承し、2016年5月に現院長に受け継がれた。現院長は継承に際して施設名を「大森クリニック」に改称し、同氏の専門である心臓血管外科を含む循環器と、前院長の専門だった皮膚科を中心とした医療を提供する。診療の特長の1つはフットケアであり、特に下肢静脈瘤の日帰り治療に力を入れている。

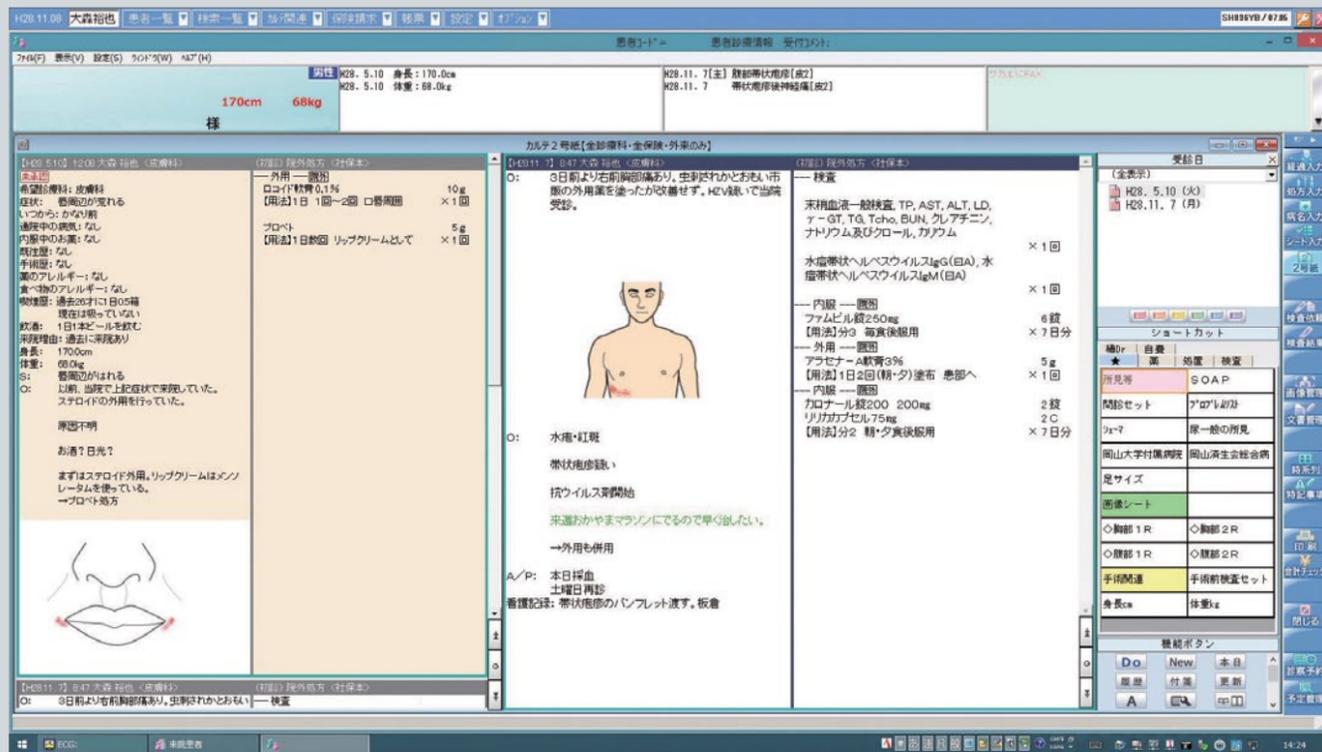
2階建ての施設は1階が診察・検査用、2階は手術用のフロア構

成である。1階に診察室2室を設置し、検査室にX線撮影装置や超音波診断装置などの機器を配置。2階は手術室の他、リカバリー室2室、パウダールーム1室を備え、廊下をカーペット貼りとした上質な設計が特長となっている。

スタッフ構成は、院長の他に非常勤医1名、看護師2名（常勤・非常勤各1名）、事務員2名。

住所：岡山県岡山市北区中山下1-6-18
電話：086-222-6369
標榜科目：循環器内科、皮膚科、外科

2号紙画面



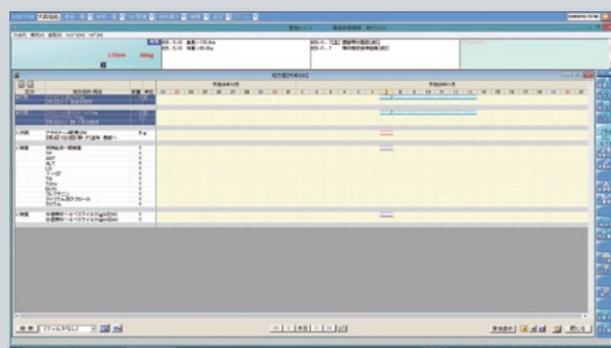
2号紙画面には患者基本情報の他、アレルギー情報やメモを常時表示。画面の切り替えなしに過去カルテを参照できるなど、電子カルテとしての基本機能を多彩に設定

シート入力画面



薬や検査、処置、主訴、所見、病名の情報などを、テンプレート化された画面から選択するだけで容易に入力できる

処方歴画面



処方歴の患者別管理の他、時系列表示機能により処方薬や注射の実施、処置などの実際の効果をビジュアル的に確認可能



1階受付に端末を2台設置。事務員は患者コードの入力だけで再診受付が完了するなどの医事会計機能を高く評価



2階受付の端末はノートPCで対応。現在は、職員は常駐しないが、将来的な本格活用を前提にネットワークを整備

大森クリニック システム構成図



2階には手術室(写真)の他、リカバリー室2室とパウダールーム1室を設置。手術件数は現在、週2件程度で推移

患者個々にフォルダーで一元管理しているのですが、診療において頻繁に活用する情報ではないため、管理の効率性というメリットを得られるだけで十分と考えます。また、情報の出し入れのしやすさや閲覧性など使い勝手の面でも全く申し分ありません。

それ以外に簡易サマリー的な機能を活用できるなど、便利な機能の例はいくつも挙げることができます。

勤務医時代に使用していた電子カルテは、基本的に総合診療用のレイアウトになっていたがゆえに、専門分野の診療において使いづらいと感じることも多々ありました。その点、「Medicom-HR III」は、効率性を重んじる開業医向けの電子カルテとして、とてもよくできていると

思っています。

——「Medicom-HR III」に対するスタッフの評判はいかがですか。

特に事務スタッフが電子カルテの運用を歓迎しているようです。初診受付は保険証スキャナや画像保存用スキャナの導入によりスマート化を図れましたし、再診受付についても患者コード入力だけで簡単に登録が完了する「Medicom-HR III」の医事会計機能の使い勝手に対する評価は高いです。

レセプトはスタッフと私で二重チェックしますが、「Medicom-HR III」の場合、レセプトチェック機能の「点検アシスト」に加え、薬に対する併存病名や病態等の修飾語の付加を要する適応症のチェック機能を有していることもあり、スムーズ

に作業できる上に正確で、返戻はほとんどありません。また、レセプトのオンライン請求に関しても、ベンダーの熱心な指導もあって電子カルテ未経験のスタッフもすぐにスムーズに行えるようになりました。これはクリニック運営の観点から非常にありがたいことですね。

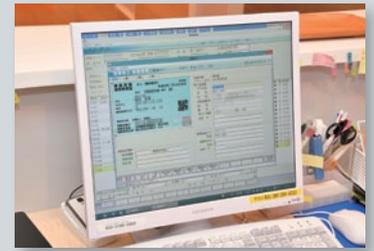
経営支援ツールとしての電子カルテ活用に期待

——電子カルテ運用上の工夫について、お聞かせください。

一例を挙げると、処置室に検査用ラベルプリンタと検査・指示箋用プリンタを設置し、電子カルテと連動させています。指示箋に関しては、端末を介した電子的な指示も考えましたが、看護師が紙運用



大森院長は通常、皮膚科関連の医療機器を置く診察室1（写真）で診察。必要に応じて診察室2に移動して診察を行う



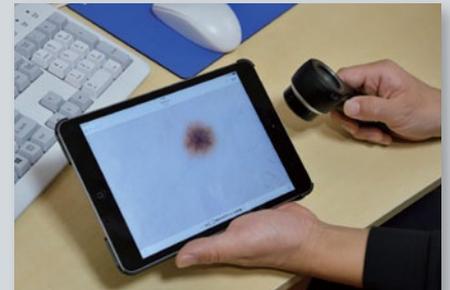
1階受付端末と保険証スキャナを連携させ、初診受付の作業効率を向上。併せて画像保存用スキャナも連携させて活用



処置室に導入した小型ノートPC端末は、将来的には往診を中心とする在宅医療ツールとして活用する予定



検査・指示箋用プリンタおよび検査用ラベルプリンタを導入し、診察室に居ながらにしての検査指示を実現



ダーモスコピー検査の装置をタブレット端末と連携させて患者のインフォームドコンセントなどに活用

を希望していたため、その円滑化を目的にプリンタを追加することにしたのです。これは看護師に大変好評で、私の指示が確実に伝達できる点においても良かったと思っています。IT化は医師が一方的に進めるのではなく、職員の意見も取り入れ、合意の上で推進した方が運用面でもうまくいくと実感しましたね。

また、電子カルテと連動させてはいませんが、タブレット端末を皮膚科の診療に活用しています。具体的には、ダーモスコピー検査の装置をタブレット端末と連動させて患部の撮影画像を端末に表示し、リアルタイムに患者さんのインフォームドコンセントを行うというものです。

ちなみにタブレット端末は、携帯の容易性というメリットがあるので、往診時の電子カルテ端末として活用できるようになるとうれしいですね。

——ITシステム活用の将来展望について、お聞かせください。

ITシステムの特長の1つが、統計機能にあることは言うに及びません。クリニックITの場合は、「段階的リサーチ」に活かすことができるのではないかと考えています。

ITによるリサーチによりまず実態がつかめると思われるのが、患者さんの住所や年齢層、疾患などの統計データから判明する地域の現況です。これらのデータ収集を積み重ねることで運営・経営面への貢献が期待できる他、例えば将来的に地域で必要となる医療を予測することなども可能となります。また、当院は院外処方なのですが、院内処方のクリニックであれば、統計・分析対象に処方傾向等も加えることで、ジャスト・イン・タイム的な薬剤の在庫管理が可能になる

かもしれません。

開業医も個人事業主であり、経営支援的な電子カルテの使いこなし方は今後、クリニックにおいてもますます重要視されていくと考えます。「Medicom-HRⅢ」は、そうした面においても頼もしいパートナーになってくれると期待しています。

Doctor



大森裕也（おおもり ひろや）氏

1996年日本医科大学卒、日本医科大学付属病院、日本医科大千葉北総病院、国立療養所福島病院、浦添総合病院等を経て、2016年5月に医院継承の形で大森クリニックを開業、現在に至る。